

令和7年度(2025年度)秋季特別展

生誕110年記念

西村公朝

釈迦十大弟子を彫る

会期:10月18日(土)~11月24日(月・休)



十大弟子像 平成6～15(1994～2003) 京都・愛宕念仏寺蔵

当館初代館長・西村公朝(1915～2003)にかかわる特別展はこのたび4回目を迎えます。今回は西村の生誕110年を記念して釈迦の十大弟子を取り上げることとなりました。

仏像の彫刻家・修理技術者として知られる西村ですが、晩年、釈迦入滅と同じ歳から十大弟子の像を年に1体ずつ彫ることを発願しました。そして大願成就の数ヵ月後、静かに息をひき取りました。その意味で、「十大弟子像」は西村の彫刻家としての最晩年を飾る渾身の力作群と称しても過言ではありません。

本展示では、10体の「十大弟子像」が久しぶりに当館で勢揃いするほか、そのプロトタイプ(原型)と言える「天龍一指頭」(当館蔵)も加わり、西村が求めてやまなかった「祈りの造形」の世界に迫ります。あわせて関連の資料とともに晩年の足跡も紹介いたします。

(当館特別館長 中牧弘允)

西村公朝 晩年のあゆみ

はじめに

吹田市立博物館初代館長の西村公朝は、美術院（現公益財団法人美術院）の仏像修理技術者、仏像彫刻家、天台宗僧侶など、多岐に渡る活動で仏教美術史に大きな功績を残した人物です。当館では、平成17年（2005）「西村公朝 祈りの造形」、平成20年（2008）「西村公朝一たどり来し道一」、平成27年（2015）「生誕100年 西村公朝展 ほとけの姿を求めて」といった西村公朝がテーマの特別展を定期的で開催しました。平成29年度（2017年度）には、未公開作品を含む600点以上の作品及び資料がご家族により当館に寄贈・寄託され、現在では当館の美術工芸資料のコレクションの柱の一つとなっています。の中には彫刻や絵画作品のほか、原稿、挿絵原画、仏像修理を記録したノートなど、公朝が晩年まで手元で大切にしてきた秘蔵の資料も多くあります。平成30年（2018）開催の「西村公朝 芸術家の素顔」は、そのコレクションのお披露目とも言える特別展でした。また、館蔵品がメインの企画展や常設展示室での作品公開の機会を設け、西村公朝の業績とコレクションの発信を続けています。

80歳を迎えた公朝

さて、今回の令和7年度（2025年度）秋季特別展「生誕110年 西村公朝 釈迦十大弟子を彫る」では、80歳以降の公朝にスポットを当て、《十大弟子像》（京都・愛宕念仏寺蔵）に加えて当館の西村公朝コレクションを紹介します。

まずは平成6年（1994）に数え年で80歳を迎え、《十大弟子像》制作を発願した公朝の状況を整理しましょう。80歳の公朝は、教育者、仏像修理技術者として、指導や助言を行うことがあったものの、第一線からは退いていたようです。僧侶としては、平成元年（1989）に就任した清水寺信徒総代を継続し、また、平成4年（1992）就任の吹田市立博物館初代館長を勤め、講演会を行うなどしています。制作活動はなお精力的に継続し、東京藝術大学の教え子たちとの「ほとけの造形展」を昭和46年（1971）以降、年一回開催していました。完成した《十大弟子像》もこの「ほとけの造形展」で毎年発表しています。

「ほとけさま」が彫らせている

このたび、当館では10年ぶりにご覧いただく《十大弟子像》は、釈迦が入滅した80歳（数え年）を迎えた公朝が、毎年一体ずつ制作することを発願して挑んだものです。公朝は、10年目に最後の一体「迦旃延」を完成させたのち、2か月で逝去しました。「迦旃延」の制作に立ち会った公朝の子・西村公泉氏は、「私は彫刻を彫る父の姿を殆ど見る事がなかったが、十大弟子の最後の迦旃延だけは最初から最後まで見届けた。住まいの横のアトリエに行くのも手を引き、そんな手で鑿を持ち玄能を振れるかという体で材を前にした時、震える手は止まりカンカンと鑿の音は鳴り響いた。それは、『ほとけさま』が彫らせているとしか思えなかった。」（注1）と公朝の様子を振り返っています。

公朝は、学生時代に仏像に魅了されたものの、一度は教員となって働きはじめました。しかし元東京美術学校教授で当時美術院所長の新納忠之介との運命的な再会により、仏像修理技術者の道に進みました。以来、古くから人々が信仰の対象としてきた仏像と向き合い、「祈りの造形とは何か」を生涯探究し続けました。昭和30年代ごろから自身も奉納のための仏像を制作するようになった公朝が、最後に挑んだ《十大弟子像》は仏像彫刻家・西村公朝の集大成であり、祈りの造形の精華と言えるでしょう。

公朝が伝える仏の心

平成12年（2000）、公朝は第一回円空大賞を受賞し、平成14年（2002）には岐阜県美術館の円空大賞展に《十大弟子像》が展示されました。岐阜県主催の円空大賞は、「『円空』を彷彿とさ



十大弟子像の制作 平成12年(2000)頃 当館蔵

せる顕著な業績をおさめている芸術家の方々を顕彰」（注2）するもので、現在も継続しており、令和6年（2024）4月には第12回の受賞者が発表されています。岐阜県発表の資料には受賞理由が列挙されていますが、「同氏が住職を務める念仏寺には、自分の仏を彫りたいという一念で訪れる人が多く、1981年（昭和56年）から五百羅漢の制作が始まり、現在1200体もの羅漢が並んでいる。現代を生きる我々にとって大きな問題の一つである心の問題に対して正面から取り組み、人々の心を癒し安らぎを与えるために、羅漢づくりの指導に取り組んでいることは、今日的な意義のある活動として注目できる。また、それは、人々の幸福を願って12万體もの仏像を彫った円空に通じるものがある。」（注3）とあり、愛宕念仏寺での一般市民による五百羅漢制作を挙げ、仏像彫刻家としての業績に加えて、現代に生きる私たちに仏の心を伝えるディレクター、もしくはプロデューサーのような側面を評価しています。

公朝の同様の業績としては、平成12年（2000）にはじまった清水寺の青龍会があります。この青龍会は、清水寺の音羽の滝に龍が水を飲みに現れるという伝説に基づいて公朝が監修した行事で、古経（紙）で作られた全長18メートルの龍が門前町や境内をダイナミックな動きで練り歩きます。迫力ある龍やワダエミのデザインした装飾的な衣装を一見しようと毎年多くの人々が集まっています（例年3月、4月、10月に開催）。

愛宕念仏寺の五百羅漢制作は多くのメディアでも取り上げられ、公朝はその親しみやすい人柄と言葉で仏の心をお茶の間に伝えました。さらに言えば、今日では書店に数多く並ぶ仏像鑑賞に関する書籍は、公朝が著した『仏像の再発見 鑑定への道』（吉川弘文館、1976年）が先駆けの一つであり、私たちが仏像を美術的な価値として鑑賞



勝鬘夫人像の制作 年不詳 当館蔵

し、それによって仏の心を身近なものに感じるのは公朝の存在が少なからず影響しています。

おわりに

80歳以降の西村公朝は、『十大弟子像』にはじまり、鹿児島・紹隆寺の《釈迦三尊坐像》、京都・愛宕念仏寺の《虚空像菩薩立像》（原型は1970年代に制作）、奈良・法隆寺三経院の《勝鬘夫人像》・《維摩居士像》を制作、『極楽の観光案内』（新潮社、1998年）、『わが般若心経』（新潮社、2002年）など多数の著作を発表しています。どれも公朝がこれまで歩んできた多様な側面を作品として昇華させたものと言えるでしょう。

本展の開催により、「ほとけさまが彫らせている」とも感じられる晩年の公朝作品を総じてご覧いただくとともに、当館の西村公朝コレクションについて知る機会となれば幸いです。

注1 『西村公朝 祈りの造形』吹田市立博物館、2005年、73頁

注2 岐阜県ホームページ内「これまでの円空大賞展」（2025年8月13日参照）

<https://www.pref.gifu.lg.jp/page/2201.html>

注3 岐阜県ホームページ内「第一回円空大賞」（2025年8月13日参照）

<https://www.pref.gifu.lg.jp/uploaded/attachment/209266.pdf>



勝鬘夫人像 平成13年(2001) 当館蔵



令和7年（2025年）7月23日、愛知県立芸術大学名誉教授の山崎隆之さんに、西村公朝さんとの思い出や仏像の研究についてお話をうかがいました。



山崎 隆之（やまざき たかゆき）

愛知県立芸術大学名誉教授。東京藝術大学大学院美術研究科修士課程（保存修復技術専攻）修了後、東京藝術大学美術学部附属古美術研究施設助手を経て、愛知県立芸術大学美術学部教授、奈良大学、京都造形芸術大学非常勤講師を歴任。

中牧：西村公朝さんの展覧会は何度もしていますが、特別展は久しぶりです。今回は釈迦十大弟子の展示をしますが、山崎先生は公朝さんの一番弟子にあたりますよね。

山崎：西村先生はとてもマルチで、修復家、彫刻家、さらに教育者、研究者、宗教家、いろんな方面で活躍していましたから、それぞれの分野で優秀な弟子たちがいます。私は研究の分野では一番目で、一人だけでした。

私が西村先生から教えを受けた期間というのは、東京藝術大学（以下、藝大）時代だけです。先生が定年退官されたあと、私は愛知県立芸術大学（以下、愛知芸大）に転勤し、お会いする機会がなくなりました。

中牧：公朝さんは、藝大には最初は講師として着

任したんですね。

山崎：当時は美術院の所長さんでやめるわけにはいかなかったのです。ちょうど藝大の保存修復技術専攻という大学院が設立された年に、私がたまたま仏像の修理を志望しました。当時、大学には専門の先生がいませんでした。油画科には材料研究室があって、国立民族学博物館にいらした森田恒之さんたちがそこで勉強されていました。ですから、油絵の修復というのは母体がありました。けれども、新たに文化財修理の大学院を立ち上げるにあたり日本画と仏像彫刻部門が必要だということになりました。日本画には法隆寺金堂壁画模写を担当された先生が何人もいらっしゃいましたが、仏像については、専門の先生はいませんでした。保存修復の大学院は、当時の文化財保護委員会、今の文化庁の美術工芸課長であった毛利登さんが立ち上げのときの教授として迎えられました。その先生の専門は工芸で、彫刻ではないということで、西村先生に来ていただくとの前提があったらしいのです。当面は、非常勤講師として来ていただいて、ゆくゆくは柱になっていただくということだったと思います。

先生は1967年には助教授になりましたが、この時は兼業という形でした。でも、いよいよ教授になるっていう段階になるとそうはいかないので、美術院の所長職は小野寺久幸さんに譲って、西村先生は常務理事になりました。

中牧：どうやって通勤していたんですか。1964年には新幹線が通っていますが。

山崎：新幹線を使っていましたが、「ひかり」がお嫌い、必ず「こだま」でした。先生は早い

と高いところが苦手でした。東京へは月に1回は必ず行って、1週間ぐらい滞在して学生の指導をしていました。一方で、奈良に附属古美術研究施設っていうのがあって、先生はその施設長でもありました。そこは各科の学生たちが、奈良・京都の仏像や仏画を見学して勉強するところで、その中に保存修復技術研究室の分室があり、私は、その分室に非常勤講師として勤務しました。西村先生は美術院を終えてから夕方お見えになって、そこで始めた授業が仏像衣装のコスプレです。それは私も受け継いで愛知芸大でもやっていました。吹田市立博物館でも一度やらせていただきましたね。

先生はお昼前に研究室に見えるときは、「パンを買ってきてくれ」って、それが昼食でした。パンはアンパン、ジャムパン、クリームパンと決まっていた。外食の場合も、昼はドーナツ、夕食はハンバーグでした。

西村先生は大学の紀要に論文をいくつか書かれています。その論文に関しては私がお手伝いしたのもありますし、先生お1人でお書きになったものは、後で校正の段階で見せていただいたりすることもありました。

中牧：山崎先生は西村先生の授業を受けましたか。

山崎：西村先生が着任したのは私が大学院の最後の年だったので正式な講義は受けていません。でもちょうど夏休みに、栃木県の大谷寺で美術院が石仏の修理中でした。石仏の修理が2年目で最後だから、そこに行って勉強して来いっていうことになりました。石仏の本体部分は前年に樹脂含浸が終わっていて、建物の縁の下だけ作業が残っていました。そこに潜って行って、壁面に樹脂を吹きつけて、その当時は熱乾燥だったので300～500ワットのタングステンの電球を6発ぐらいつ

けてずっと乾かしていました。それが何列もあって、もう酷暑で大変でした。それが私の最初の修復の勉強です。

その次は、東京にいても西村先生の授業は受けにくいということになって、まず半年間、美術院に国内留学のかたちで受け入れてもらい、基本はお掃除とお茶くみをやることになりました。先輩の技術者の人たちがいらしたんですけど、目の前でノートをとったりすることはいけないぞ、話聞いても後でトイレに駆け込んでトイレで小さな手帳にメモするようにと教えられまして。だから、表向きは何にも勉強してないかたちでした。それは西村先生もお若い時に苦労されたことだったからだと思います。そのうち徐々に技術者の人たちと打ち解けてきて、こちらも居心地よくなったということもあって、1年留年しました。ですから、1年半美術院でお世話になりました。その間に重要文化財クラスの仏像を間近で見るという、すごくいい体験をしまして、それが私の基礎になっていますね。

中牧：仏像が運ばれてくるんですね。

山崎：像底も見られます。ただ私は、お手伝いで運ばれた担架を持ったりはできるけど、仏像は触っちゃいけないって言われていました。

中牧：西村先生はそういう時はいらっしゃらないんですか。

山崎：そうなんです。だから技術者の先輩たちに「俺たちは藝大から給料もらってないぞ」って言われました。だから教える義務もないと。それでも多くの事を教えて頂きました。



山崎：論文のことで言いますとね、この藝大の紀要の第4号というのに「広隆寺弥勒菩薩像の構造

についての考察」という論文を書かれています
が、これは西村先生が日本の彫刻史に問題提起し
た最初です。

他の論文の中では「浄土寺阿弥陀三尊像とその
視覚的環境について」が画期的な内容です。西村
先生が気づかれて、我々がお手伝いして、それを
検証しました。逆光でありながら仏像がちゃんと
見えるという不思議な構造になっています。西村
先生以前の人は気付いてなかったことです。だか
らこれは画期的な論文でした。今は定説になって
います。

中牧：灯りの角度によってイメージが本当に変わ
りますね。

山崎：はい。この「宗教的視角による仏像美の研
究」で取り上げられている清凉寺のお釈迦さん
は、本当は丸顔なんです。ところが、西大寺に
やっぱり清凉寺式のお釈迦さんがあって、それは
鎌倉時代に実際に仏師が清凉寺に滞在して造った
像ですが、なぜか似ていないんです。顔が長くて
額が狭くて、たぶん衣紋もちょっと違います。ど
うしてかなと、私も長いこと気になっていたとこ
ろ、たまたま清凉寺のお釈迦さんを近くから見せ
ていただく機会がありました。その時に試しに上
からのライトと下からのライトで照らしてスケッ
チしてみました。それで下からのライトの場合、
額が狭く、首が長く、頬も顎も明るくなるため面
長になりました。やはり、当時の仏師たちも下か
らの光で見ていた、ということが確認できまし
た。

「近世仏像の技術的再検討 木寄と雛型」とい
う論文は私との共著で、西村先生所蔵の仏像の雛
型について書きました。実はその雛型は西村先生
が藝大の西田正秋さんっていう人体美学の先生に
長年の間預けっ放しだったんです。「それ絶対返
してもらわなきゃいけないですよ」と私が言っ

て、「若い者がそれについて論文を書く」という
名目で交渉していただき、何か月か後にやっと返
していただきました。雛型は西村先生が骨董市の
ようなところで見つけられたそうです。西村先
生は偉い人で、お立場上いろんなものを手に入れ
られるのに、自分がそういう物を持つべきでない
という、信念をお持ちでした。だから仏像関係の
西村コレクションってほとんどありません。ただ
唯一この雛型があります。先生は「どうしてもこ
れは自分が手元に置いておくべき」と思ったけれ
ど、自分では買えない値段だったから、お父さん
にお金出してもらったって仰っていましたね。

中牧：苦しいときの父頼み、でしょうか。

山崎：あ、そういうことですね。同じ論文にある
お不動さんも面白いですよ。西村先生の指導で修
理しましたけど、解体したらとんでもなくバラバ
ラになっちゃいました。違う時代の断片をいっ
ぱい集めてきてお不動さんの顔に造り変えている
ことが分かりました。もともとはお不動さんの顔
じゃない。お不動さんってふつうは天地眼じゃな
いですか。天地眼になるように違う仏像から半分
ずつ顔を持ち寄っているんですよ。半分は愛染
明王の顔、もう半分は、馬頭観音か四天王の顔
だと思います。その違う顔が二つとも口が開いて
いた。そこに木を埋めて口も閉じていました。耳
は、耳の上のつぶつぶを木屑で埋めていました。
つぶつぶは螺髪で、如来の耳を利用していました。

私は、ちょっと骨董屋さんが悪いことしたので
はないかなと思いましたが、西村先生は宗教家で
すから、たくさんのいろんな仏像のご利益を集め
て一体にしたって説明されていました。それは
我々にはなかなかできない説明だなんて思いまし
た。



山崎：西村先生の十大弟子の制作は全く立ち会ったことはありません。作品をぱっと見て、西村先生の頭の中に、誰かお世話になった10人の方々がいらっしまったのではないかなと思いました。例えば清水寺の大西良慶さんとか。特に一番最初のお像は大西良慶さんと顔つきが似てるような気がします。とくに目が。また、頭がポツと膨らんだお像もありますよね。ちょっと肉髻にっけいみたいになっているでしょ。以前、西村先生から直接お聞きしたことですけどね、大西良慶さんが亡くなった後、2回お別れに行っているんですよ。2回目に行った時に頭がぶくっと膨れていたって仰っていました。で、とても不思議に思われたそうです。西村先生がお釈迦さんの頭を説明する時、「智慧こぶがあるから」ってよく冗談で言っていましたけど、これそうじゃないかなって思ったそうです。もしかしたら十大弟子像のいろんなところに良慶さんが散りばめられている可能性があります。

あと、大体みんな童顔じゃないですか。ぽってりとした。けれどこの2番目に作った像は四角い長い顔ですね。西村先生の顔つきに似ていると思いました。大西良慶さんを最初に造られて、良慶さんの弟子であるご自分を表したのではないのでしょうか。

中牧：十大弟子制作の直前の作品《天龍一指頭》は大西良慶さんがモデルと言われています。十大弟子像のプロトタイプみたいな感じかな。

山崎：そうですね。すべてのイメージが良慶さんで、そこからいろんな表情に分かれたのが十大弟子像かもしれません。どこにも良慶さんがいらっしゃるんでしょうね。ただ1人だけ良慶さんの顔付きじゃない人が、それはご本人ではないでしょ

うか。

中牧：公朝さんの絵には自分を小さく入れた作品《釈尊伝》があります。奥様に似ている作品《夫婦福神》（4頁写真左端）もありますね。

山崎：奥様を知る人はみんな、「そっくり」と言っていましたね。奥様に対する感謝の気持ちでしょうか。上に載っている男神像は丸顔だから西村先生じゃないですね。お孫さんでしょうか。

中牧：十大弟子は毎年1体ずつ彫ったというのもすごいことです。私も傘寿が近づいています。今の私の年から10年と思うと大変なことです。

山崎：はじめるときにはもうイメージがあって、生きる目標を持って取り組んでおられたんでしょう。柔らかいヒノキだからできたっていうのもありますね。しかも良質な木曽ヒノキ。今はなかなか手に入りません。それにしても、特別館長さんがおっしゃる通り、すごいことです。

中牧：11月の講演会も楽しみにしています。よろしく願いいたします。



十大弟子 阿難 平成6年(1994) 京都・愛宕念仏寺蔵

吹田市立博物館 令和7年度(2025年度)秋季特別展 「生誕110年記念 にしむら こうちょう 西村公朝 釈迦十大弟子を彫る」関連イベント

■オープニングイベント 開会式&展示解説

日時：10月18日（土）午後1時～2時

※無料観覧日

会場：3階ロビー・特別展示室

■講演会

定員：120名(申込不要、当日先着順) 会場：2階講座室

□「公朝先生が携わった文化財修理とは 大報恩寺 十大弟子像を例に」

日時：10月18日（土）午後2時30分～4時

※無料観覧日

講師：片山毅氏（公益財団法人美術院養成部長・
京都国立博物館工房長）

□「西村公朝先生の仏像研究 仏像彫刻に仏師の技と心を探る」

日時：11月1日（土）午後2時～3時30分

講師：山崎隆之氏（愛知県立芸術大学名誉教授）

■特別館長によるギャラリートーク

※申込不要、要観覧料

日時：11月9日（日）午後2時～3時

会場：3階特別展示室

■担当学芸員による展示解説 ※申込不要

日時：11月16日（日）①午前11時～、②午後2

時～（1時間程度） ※無料観覧日

会場：3階特別展示室

市内の小中学生は「ぐるっとすいたカード」提示で「すいたのおたからカード」をプレゼント！
「すいたのおたからカード」を2枚あつめると、すいたんのコンプリートカードがもらえます。
(カードの配布は一人一日1枚です。枚数には限りがあります。)

■知的障がい者向けワークショップ「Sama-Sama 塾」 in すいはく 会場：2階講座室

展覧会に関するわかりやすい話やクイズラリー、ぬり絵などの制作・体験します。

日時：11月8日（土）午後1時30分～4時

講師：信田敏宏氏（国立民族学博物館教授・「みんなぱく Sama-Sama塾」主宰）

対象：小学5年生以上で療育手帳を持っている人。同伴の保護者又は介護者。

定員：15組。※要申込：10月28日（火）必着・多数抽選。

申込方法：吹田市電子申込システム（10月1日より受付）か、はがきかFAXに①イベント名、②氏名（参加者全員）、③郵便番号・住所・電話番号（代表者のみ）を記入のうえ締め切り日までに博物館へ。



電子申込QR

※吹田市電子申込システムはイベント名で検索してください。

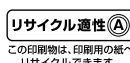
■クイズラリー ※申込不要、要観覧料

日時：10月26日（日）、9日（日）、11月23日（日・休）いずれも午後1時30分～3時

会場：3階特別展示室

※参加者にはオリジナルグッズをプレゼント！

吹田市立博物館だより 第103号 令和7年（2025年）9月15日発行 編集・発行：吹田市立博物館
〒564-0001 吹田市岸部北4丁目10番1号 TEL：06（6338）5500 FAX：06（6338）9886
ホームページ：https://www.city.suita.osaka.jp/museum/ ホームページではバックナンバーをご覧いただけます。



この冊子は1,500部作成し、1部あたりの単価は60円です。
環境に配慮した用紙と植物油インキを使用しています。